

# アユ冷水病魚における腎臓からの原因菌の分離について

宇野 悦央

前回、アユ冷水病魚の腎臓から白金線を用いて原因菌の分離を行なったところ、鰓蓋下部の出血・潰瘍症状を伴う個体については、分離率が他の症状のものとは比べ極めて低かった。<sup>1)</sup>そこで、同症状の個体の腎臓から冷水病菌をよりの確に分離する方法を検討した。

## 材料および方法

検査に供したアユは鰓蓋下部の出血・潰瘍症状を伴う冷水病魚で、1995年1～7月にみられた14例（45尾、平均体重1～20g）である。冷水病菌の分離は、腎臓から白金線を用いて塗抹する方法（以下A法と称す）およびピンセットで腎臓の一部（5～20mg程度）を摘出し直接塗抹する方法（以下B法と称す）とで行った。分離培地は馬血清を外割で10%添加した改変サイトファガ培地を使用し18℃で培養した。

## 結果および考察

両法による冷水病菌の分離状況を表1に示した。各症例における分離尾数は、総体にB法の方がA法より多いか同じであり、分離率はA法が24%、B法が56%でB法の型がA法よりも2倍以上高かった。

このことから、腎臓から冷水病菌を分離するには、腎臓の一部を摘出しそれを直接塗抹する方法が適していることが判明した。なお、参考までに行なった他の症状のもの（27尾）についても、分離率は同様にB法（81%）の型がA法（59%）よりも高かった。

## 文 献

1) 宇野悦央, 見奈美輝彦: 養殖アユの冷水病の症状と原因菌の分離状況について. 平成6年度和歌山県内水面漁業センター事業報告, 20, 16-19 (1996)。

表1 腎臓からの分離状況

症例 No	検査 尾数	分離方法 <sup>*1</sup>	
		A	B
1	3	0 <sup>*2</sup>	3
2	3	0	1
3	6	1	5
4	5	2	2
5	3	3	3
6	1	1	1
7	4	0	2
8	6	0	1
9	4	1	2
10	2	1	2
11	2	0	1
12	2	0	0
13	1	1	1
14	3	1	1
計	45	11	25

\*1 A: 白金線塗抹  
B: 直接塗抹

\*2 分離尾数